わが国における場面緘黙研究の現在と今後の方向を考えるⅢ

企画者　高木　潤野　（長野大学　社会福祉学部／日本緘黙研究会）
司会者　藤田　継道　（臨床行動分析学研究所／日本緘黙研究会）
話題提供者　梶　正義　（関西国際大学　人間科学部／日本緘黙研究会）
高木　潤野
臼井　なずな（信州上田医療センター／大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究科／日本緘黙研究会）
伊藤　佐陽子（京都西山短期大学　仏教学科／子どもヨーガ研究家）
成瀬　智仁　（神戸国際大学　経済学部／日本緘黙研究会）
指定討論者　角田　圭子　（かんもくネット／三田市民病院／日本緘黙研究会）

KEY WORDS: 場面緘黙　臨床像　複合的アプローチ

【企画趣旨】

近年、場面緘黙がテレビ等のメディアでも採り上げられることが増えてきた。当事者や保護者だけでなく、学校教育や支援関係者の間でも関心が高まりつつあることが感じられる。また日本緘黙研究会をはじめ、親の会や当事者団体等のネットワークの構築も進み、研究者や支援者、保護者、当事者の交流や、場面緘黙についての専門的な研修の機会も増加している。

その一方で、わが国における場面緘黙に関する実証的な研究成果の蓄積は充分ではない。場面緘黙は、身近な人間関係（メゾ）から文化・社会レベル（マクロ）まで、様々なレベルでの環境因子の影響を受ける。このため、日本の学校や社会で生じている場面緘黙を正しく理解するためには、海外の研究成果だけでなくわが国における研究が不可欠である。

以上のことから本シンポジウムでは、場面緘黙についての理解を更に深め、より適切な支援や治療の在り方について検討することを目的とする。小学生における大規模調査による出現率、ことばの問題との関係、身体へのアプローチ、という３つの視点からの最新の研究成果に基づいて検討を行うことによって、より多面的に場面緘黙の全体像を描き出し、支援の在り方を考察する。

【話題提供者の趣旨】

場面緘黙の出現率に関する調査報告　梶　正義

教育現場において場面緘黙への対応をすすめていくには、その出現率や症状の程度、教師の対応、保護者との連携等についての情報を得ることが重要である。特に、場面緘黙の出現率について調査を進め、その実態を明らかにしていくことは、学校・園において支援を必要としている場面緘黙の子ども一人一人を早期に発見し、早期に対応することへと繋がると考えられる。また、場面緘黙の出現率の調査がより広範囲で行われていくことにより、文部科学省の学校基本調査に場面緘黙に関する項目が加えられる可能性が増すことに期待したい。

本シンポジウムでは、神戸市（調査時人口 153 万 5377 人）と尼崎市（調査時人口 46 万 3662 人）の小学校を対象に行った場面緘黙の出現率に関する悉皆調査の結果について報告する。

場面緘黙児の「ことばの問題」への注目
高木潤野・臼井なずな

場面緘黙の背景には強い不安や恐怖があると考えられているが、不安や恐怖がどのような形の行動として現れるかは人によって様々である。人や集団を避ける者もいるし、特定の場所や対象に対しての回避的な行動を示す者もいる。これが「話すこと」の問題として現れるというのが場面緘黙の一つの特徴である。場面緘黙のように強い不安や恐怖心を抱いている子の「話すこと」が困難になる背景には、不安や恐怖に加えて「話すこと」自体に関わる何らかの問題も存在しているのではないだろうか。

海外の研究では、場面緘黙児の半数程度には言語障害や言語能力の問題があることが指摘されている。しかし日本語を母語とする場面緘黙児についてはこれまで研究が行われていない。筆者らは 50 名の場面緘黙児を対象に言語能力についての調査を行った。その結果、対象児の半数程度は言語能力が低い可能性があることが示された。ことばの問題へ注目することによって、場面緘黙の理解やアセスメント、介入を行うための視点をより広げることができると考える。

場面緘黙児の身体へのアプローチ（ﾏｲﾝﾄﾞﾌﾙﾈｽ・ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑを活用した不安軽減の実践）伊藤佐陽子・成瀬智仁

場面緘黙児は緘黙だけではなく、緘動が生活場面での質的支障となることが多い。特に重度の緘黙児ほど身体的緊張を伴い、身体活動の機会を損なう傾向にある。そこで身体的な緊張と弛緩を意図的に体験できる遊びを通して、子どもの意欲や主体性を育むことをねらいとした「カラダ・こころあそび支援プログラム」のワークショップを場面緘黙児と保護者に向けて定期的に実践した。その際、ヨーガ遊びや臨床動作法等を活用し、「今、この瞬間の体験に意図的に意識を向け、評価をせずにとらわれのない状態でただ観る」というマインドフルネスを体験できるようにした。201X 年 Y 月の第Ⅰ期親子 6 組 3 回、201X 年 Y+4 月からの第Ⅱ期親子 17 組(当初 10 組)8 回について、事前、中間、終了後のデータの分析から場面緘黙児の症状について変化を認めることが出来た。また、保護者への聞き取りやアンケートによる評価によっても支援プログラムによる効果が確認できたため、緘黙支援の手がかりの一つとして報告する。

【指定討論者の趣旨】角田圭子

場面緘黙は、苦痛を伴う発話の回避によって、症状が維持される不安症である。その臨床像は多様で、併存症をもつことも多く、子どもによって異なる要因によって症状が形成され維持される。そのため、多職種連携の複合的アプローチが必要とされている。わが国における場面緘黙の啓発と早期発見、効果的な支援を探るためのシンポジウムになればと考える。

(TAKAGI Junya, FUJITA Tsugumichi, KAJI Masayoshi, USUI Nazuna, ITO Sayoko, NARUSE Tomohito, KAKUTA Keiko)